

## 仏語と友達になる話

高橋 武 美 (化学)

学部に進学して数ヶ年ほど経った頃、講義や実験と関連した文献の中に自分の不得意な語学で書かれたものを見出した時、当惑を感じた経験を誰もがもっておられることと思います。小生にとって、仏語はその一つでありました。ご承知のように、わが国の語学教育では大多数の学生は先ず英語、ついで独語を学習するのが普通であり、その他の語学については、少数の方の場合を除きなじみが少いわけです。理学部の先生方、学生には語学に堪能な方が多く、それぞれこの問題について一家言をお持ちのことと存じます。皆様のお役に少しでも立つことを念じ、小生の経験を以下に述べます。

仏語は国際用語の一つとして、特に外交、文化、芸術の方面で人気があることは、小生の学生時代も同じで、学部の友人の中にアテネ・フランセ（お茶の水）に通うものが数人おりました。それにつられ、美しいマドモアゼルの先生のクラスに出ましたが、クラスの前方の席に頑張っている2、3の生徒が、小生の分らない会話を自由にこなすのに気おくれして、間もなく敗退しました。あとで分ったことは、これらの人達は既に2年ほど勉強している連中であつたのですが、後の祭りでした。気を

取り直して、再び挑戦したのは大学院に入った頃でした。今度はどうやら続き、はじめはほとんど分らなかった会話も、いつの間にかだんだんと分るような気がして、皆よりあまり後れずに笑えるようになりました。また、化学教室の友人と文学部の講義にもぐり出、中島健蔵先生の Verlainé の詩の論評を拝聴（盗聴）しました。化学実験で若干現実的になっている頭には、文学の話はまことに心地よく（これも専門となるとさぞ酷いことと思いますが）、「今日はいつもより出席がよいね」と言われ、思わず冷汗を流したことも楽しい思い出です。当時、実力のある人達は、日仏会館（お茶の水）内にあったクラスに出ていましたが、アテネ・フランセで3年ほど経った頃、これが発展的に解消し、新しく日仏学院（飯田橋）が開校されたのでこれに移りました。エコール・ノルマル出身のジャン・ルキエ氏が館長で大いに張り切っておられ、すっかり francophile になりました。少し慾を出して Cours de diplôme のクラスに出席し、フランス文学、歴史、地理、その他の講義をききました。和文仏訳はカンドー神父の担当で、「高瀬舟」の仏訳でしたが、日本語がわれわれ日本人以上に達者な

神父の仏訳は、原作以上とも思われる名訳で、語学勉強の高いレベルを雲間に眺める思いでした。また、フランス人が自国語を如何に美しく保とうと努力しているかの気迫を感じた次第です。2年後に仏国留学が実現し、勉強したフランス語がどうにか役に立つことがわかった喜びは小生にとって忘れることが出来ません。

外国人にとって、ある語学に達者であるための最良の方法は、その国で生れその国の教育を受けることであることは勿論ですが、特に幼時から小学校の間をその国に過ごされた人はその発音がそのまま記憶されているようで、このような人は特別な例外に属します。われわれのように、新しく外国語を学ぼうとする者にとって一番手っ取り早いのは、その国へ行って直接その国の日常生活の中に飛び込むことですが、これも地理的事情から日本は大いにハンデーを負っていることになります。必然、われわれは語学学校へ通うことから始めることとなりますが、幸いわれわれ本学にいる者にとって、前記の2学校が近い所にありますので、これを大いに利用すべきだと思います。以下要点と思われることを箇条書にしました。

1. 外国人(仏人)の先生につく。特に最初が大事で、初めから外国人の先生の発音を耳にすること。
2. 心臓を強くすること。相手(先生)の話していることがわからなくとも、相手(先生)は日本語がわからないので同等である。
3. 授業に出たら一番前の席をとる。当てられるのは誰でも嫌であるが、それを克服してこそ上達がある。
4. 最初は1週間の異なった日に少くとも3回以上(各1時間の授業で)出る。特に最初は大事で、1週間に2回の頻度では忘れる方が早い。1週間のある1日に3回出たのでは合計回数と同じでも頭が混乱して上達につながらない。
5. 最初の6ヶ月を欠席せずに頑張る。挫折は最初の1~2ヶ月が非常に多い。
6. 文法は気にしないで、とにかく話す。いくら実力のある人でも話さなければ相手にとっては意志の疎通は

0である。実力が30/100の人でも30話せば、あるいは50位の意志の疎通ができる。

7. 以上が実現したら、あとは自然に自分から出席したくなる筈。次の1年、2年を大切に。2年やれば、その後若干の空白があっても、簡単には忘れない。

以上、実戦的な話のみで、語学勉強法そのものについては述べませんでした。動詞の *déclinaison*、前回の授業の文章の暗誦など、毎回反復訓練があり、ともかく出席を続けてさえいけば自然に上達の道が開けます。また、上級のクラスに進学すれば、文学的な興味をもった方も大いに満足される筈です。

語尾変化の多い語学は文章論が比較的やさしく、語尾変化の少ない語学は文章論が難しいとされていますが、前者に属する仏語は語尾変化を修得すれば、後者に属する英語より学習しやすいように思われます。ともかく、仏語に限らずある一つの語学をマスターすることが肝要で、心臓が強くなることにより、2番目、3番目の外国語の修得はかなり容易となると思われます。

フランス語は、“Serments de Strasbourg (ストラスブールの宣誓; 842年)”がその最古の文献とされ、中世を経て16世紀の半ば頃より現代フランス語にはほぼ近いものになったといわれています。辞書としては、文学者は Littré-Beaujean の “Dictionnaire de la langue française” を尊重しております。百科全書的なものとしては、歴史的には Diderot-d’Alembert の “Encyclopédie” が有名であり、現代のものとしては Larousse の辞書があります。専門家でないわれわれの語学の勉強には、数多くあるそれより小型の百科辞典ではない仏-仏辞典をできるだけ早い時期より使用することが上達への道と存じます。

最後に、毎年10月上旬頃、フランス政府給費留学生の応募要項が文部省および在日フランス大使館より発表されます。試験は例年11月から翌年1月頃にかけて行われますが、学生方には奮って応募されますようこの紙面をお借りしてお願い申し上げます。